

大谷大学短期大学部 自己点検・評価報告書
2017 年度

仏教科

幼児教育保育科

<自己評定> B	<相互評定> B
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
卒業研究の作成を2年間の学修の集大成として位置づけ、さらにきめ細やかな指導体制の充実を図る。	
[達成基準]	
卒業研究提出率100%を達成する。	
[行動計画]	
2015・2016年度の行動計画を2017年度も引き続き実施するが、特に以下の2点に重点的に取り組む。	
① 開講科目シラバスの確認と卒業研究題目の関係性の確認と検討	
仏教科開講科目のシラバスに提示している学修内容・到達目標と、学生に提示する卒業研究題目との有機的連携を明確にするため、シラバスの内容を確認し、必要に応じて卒業研究題目の再検討を行う。	
② 1年次の学修から2年次の卒業研究作成への連続性を明確にした指導を行う。	
2015年度以前より1年次学生も参加する形で10月末に卒業研究中間発表会を実施しているが、これに加えて、1年次の各授業において卒業研究題目との関連を明確にしながら指導を行う。さらに演習を中心とする授業や課題レポートへの取り組みを通して、「読む・調べる・考える・書く」という、卒業研究作成に必要とされる基礎技術の習得を促す。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
卒業研究提出率は90%であった(10人中9人)。行動計画の取り組み状況は以下の通りである。	
① 5月31日(水) 昼休みに所属教員会議を開催し、卒業研究・修了レポート指導担当教員の分担を決め、卒業研究題目(主題)の選択リスト、指導の方針を確認した。	
② 6月初旬に人間とこころコース及び実践仏教コース・真宗大谷派教師資格取得コースの題目決定相談会を実施。(学生・指導教員・副査担当教員参加。人間とこころコースは指導教員と個別に実施)。	
9月14日(木)～15日(金) 一夜研修会(第1回中間発表会)を実施(学生・指導教員・副査担当教員参加。場所：セミナーハウス)〔根拠資料「一夜研修会」開催案内〕	
10月26日(木) 第2回中間発表会実施(1年次・2年次学生・指導教員・副査担当教員参加。場所) 慶聞館教室)〔根拠資料「中間発表会」開催案内〕	
11月30日(木) 仏教科関係教員会議開催。卒業研究・修了レポート取り組みの状況、口述試問における学生ごとの留意点を指導教員・副査担当教員で確認。	
12月中旬、口述試問を実施。試問終了後、それぞれの学生の状況に応じて追加レポート等の課題を提出させた。また全員に卒業研究・修了レポート要旨を提出させ、『仏教研究紀要』40号として刊行。〔根拠資料「口述試問」日程案内〕および『仏教研究紀要』40号〕	
*その他、論文作成のために仏教科一般研究室の開室時間の延長、休日開室を行ったほか、各授業担当者が一般研究室に可能な限り赴き、論文作成指導を随時行った。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
・2回にわたる発表会の実施により、学生全員が指導教員以外の教員からも細やかな助言と指導を受け	

ることができた。

・第2回中間発表会（2014年度より10月末に実施）には現在1年次の学生も参加し、先輩の中間発表とそれに対する教員の助言を聞き、自らの卒業研究の題目決定・論文作成に対する意識を高める機会となった。

[改善すべき事項]

・例年のように題目決定には時間をかけたが、それがうまく論文作成に活かされない場合があった。
・長期欠席により卒業研究を提出できない学生が1名あった。また日頃の欠席が多いために完成までの過程で十分な指導が受けられない学生が数名あった。
・できる限り個々の学生の状況に応じた指導方法を検討し、演習を中心とする平素の授業を通した論文作成指導の環境を整える必要がある。特に欠席が多い学生には、可能な範囲で短仏研究室を中心とした個別の対応が必要である。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

「一夜研修会」開催案内

「中間発表会」開催案内

「口述試問」日程案内」

『仏教研究紀要』40号（現在編集中のPDF）

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

仏教科では平素から学生に寄り添う姿勢で精力的に取り組んでいる様相がよく理解できる。特に、学生全員が2度にわたるこれらの発表会において指導教員以外の教員からも助言等を得る機会が設けられている点には注目したい。

また、「改善すべき事項」の項目では、2017年度の取り組みに関する率直な振り返りと冷静な反省等が表明され、これらは既に関係者間で認識・共有されていると思われる。よって、これらの諸課題が2018年度には改善され、さらなる発展を遂げられることを期待している。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標] 進路・就職支援の充実	
学生が自分にあった進路・就職先を意識し選択できる環境を整え、支援を充実させる。	
① 就職率 100%を目指す。(※就職率は【就職者/希望者】で計算する。) ② 公務員を志望する学生に対する支援として公務員試験対策を充実させる。	
[達成基準]	
行動計画に挙げた内容を実行した結果、就職率 100%に達した場合、目標達成できたものとする。	
[行動計画]	
① 学科とキャリアセンターとの連携を密にして学生の進路・就職に向けた支援を行う。 ・ 2年間を見通した「進路・就職ガイダンス」(キャリアセンター主催)について、学科の指導や行事との関連において、学生の学びの実情に合ったものとなるよう、日程や内容を検討するとともに学生への周知の徹底を図る。 ・ キャリアセンターへの相談、指導教員との面談を通して、学生が自分にあった進路・就職先を選択できる環境を整え支援を充実させたい。 ② 公務員対策として模擬試験および対策講座への積極的な参加を促す。具体的には、実施時期について検討するとともに、公務員を希望する学生については早期からの対策が有効であるので、意識付けを含め支援していく。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
目標①→行動計画①について	
1. 就職率(就職者/希望者) 100%	
2月現在も就職活動中の学生については、キャリアセンターによる求人情報提供や学科による助言指導を含めて支援を続けた結果、100%に達することができた。	
2. 月1回、キャリアセンターとのミーティングを以下のような内容で行った。	
(1)進路・就職ガイダンスについて(日程・内容の検討、事後の振り返り)	
(2)学生の就職活動状況について(情報共有)	
(3)公務員試験対策について(模試日程の検討、面接指導 等)	
(4)その他 就職園への採用御礼訪問、就職説明会への参加(幼稚園・保育所)、 「幼稚園教諭の魅力発見」(※1)・「保育士の魅力発見」(※2)の開催 等	
※1. 京都市私立幼稚園協会の事業との連携 ※2. 京都市保育園連盟との連携	
→学科とキャリアセンターとの連携により、学生指導や園への対応について早い段階で行うことができた。(※効果が上がっている事項1) また、進路・就職ガイダンスへの参加についても出席者数が安定した。(※効果が上がっている事項2)	
→2016年度に引き続き、第2学年対象の進路・就職ガイダンスに直前指導(7月)を追加し、これまでのガイダンス内容の総復習を行うことで、就職活動全体の流れを理解し具体的な行動計画を立てることにつながった。(※効果が上がっている事項3)	

目標②→行動計画②について

3. 公立正職員合格率（合格者/受験者）20%（2/28 現在）

非常勤、嘱託等の任期付き職員を含めると 100%

（公務員受験希望者は 6 名で、その内、正職員受験者 5 名中、一次試験合格者 1 名が最終合格者。その後、嘱託職員を受験し合格した者は 2 名。他の 2 名については私立の園を受験し合格した。最初から嘱託職員を希望し合格した者は 1 名。）

4. 公務員試験対策として 2 回（5/14・12/ 9）の模擬試験を実施した。一次試験突破を目指して、個別に受験準備の進め方などの助言、筆記試験対策を行った。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

目標①に関して

1. 学生指導に関して、キャリアセンターと学科の指導の間で行き違いが無いように、ミーティングの際だけでなくこまめに確認しあうことで、学生指導内容の共有、その後の対応の確認を早い段階で行うことができた。

2. 学生の出席率が、日程・時限により大きく変化することから、昨年に引き続き、学科行事や授業との関連を考慮し、掲示や呼びかけにより学生への周知を行った結果、第 1 学年、第 2 学年ともに安定した出席者数が得られた。ただ、第 2 学年の 6 回目については、保育実習（8・9 月）のためのオリエンテーションや体調不良による欠席者が何名か出たため、出席できない学生が出た。（欠席者については、後日、個別対応を行った）

※第 1 学年（71 名）

第 1 回（4/18） 96.8 %
第 2 回（11/3） 95.8 %
第 3 回（12/23） 94.4 %
第 4 回（1/30） 93.0%

第 2 学年（66 名）

第 1 回（4/12） 96.9 %
第 2 回（5/16） 89.6 %
第 3 回（5/10） 93.8 %
第 4 回（5/17,18） 95.4 %
第 5 回（7/5） 95.4 %
第 6 回（7/19） 79.7 %

3. 就職活動直前指導の実施により、学生が具体的な行動計画を立てることができ、キャリアセンターへ積極的に来課する学生が増えた。それにより、新しい情報の提供など個別対応が速やかに行えた。

目標②に関して

一次試験合格者に対しては、最終面接まで助言・指導を行うことで合格につながった。

正職員合格は叶わなかったものの、公務員を目指し嘱託職員として採用に至るまでのモチベーションが維持できるよう助言を行い合格につながった。

[改善すべき事項]

目標①に関して

学生が進路決定する際、これまでの継続的な取り組みの中で、ほとんどの者は主体的に行動計画を立てることができるようになっている。一方で、一部の学生については主体性における課題が見られるため、主体的な学び・行動に結びつく支援の方向を目指し、個別対応が必要である。

目標②に関して

大学としては、外部機関委託による一次試験対策のための講座を設け実施されているが、短期大学

部ではカリキュラムが過密なため利用することが難しい現状である。一斉講義に参加できなくとも、もし、Webによる受講が可能であれば利用することで効果が期待できる。外部機関と連携したWebによる対策講座が導入されたならば、内容や費用の面について検討したい。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

会議資料・ガイダンス資料

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

学生の将来にとって極めて重要な問題である卒業後の進路・就職について、学科が全面的に支援をしている様相が確認され、しかも目標通りに100%を達成している点については、大変すばらしい成果であったと認識できる。ただし、その過程では関係者各位による甚大なご努力があったことであろう。

また、点検に際しては客観的な数値を挙げて冷静に分析がなされており、改善すべき点もすでに明確にされておられるので、2018年度もこうした取り組みがなされ、相応の結果を達成されることも期待できよう。

<自己評定> C	<相互評定> C
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
学生の学習意欲と学力（広義）の向上を目指して、授業の充実を図る。	
[達成基準]	
① 2016年度から継続し、授業の方法・工夫について、学科会議で情報交換し、記録に残す。	
② 科目間のシーケンスを参考に、教科間の連携を図る。	
[行動計画]	
① 2016年度から継続し、学科会議において、授業の方法・工夫点などを共有し、課題や対応を検討する。	
② 科目間のシーケンスを完成させ、各教員の担当科目において関連する内容を洗い出し、その結果を授業に反映させる。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
① について、2017年度は2名の教員が、それぞれの授業における工夫(内容)を報告した。2016年度に続いて、これではほぼ全教員が自らの授業内容を報告し、資料を提供して、示すことができたので、①は完了としたい。(なお1名は学内で公開授業を行った)	
② については、2016年度よりさらなる進展をさせることができなかったため、継続とする。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
① については、参考になったこともあり、有益であった。具体的には、教材として多くの新聞記事を利用し多面的にテーマを検討しようとする点や、レジュメには授業内容の要点のほかに、学生がとる行動も記され、指示の周知徹底がはかられている点などである。	
② については、一部関連する教科間で共有し、やり取りを行った。具体例をあげるとパネルシアターを「児童文化」で制作上演したが、このパネルシアターを、内容はちがうものの「声楽」の授業において利用し、授業のイメージをつくる一助としたことなどである。	
[改善すべき事項]	
学科会議への全員の出席が難しい状況があったり、実習の打合せや種々の学科行事に時間がとられてなかなか課題遂行の時間が確保できなかったりしたので、全員で時間をとるように年度当初から計画していきたい。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
① については学科議事録、及び当日配布の資料2種。	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

学生の学習意欲と学力の向上という、地味ではあるが教育機関としての根幹部分を占める課題について、正面から取り組むべく目標に掲げている点に、まずは敬意を表したい。内容的にも、さまざまな教材作成や全教員で取り組む姿勢など真摯な様相が看取でき、改善すべき点があるとしても、一定の評価をしたい。

ただ、今後は目標達成の度合いを分析するための効果測定手段等があれば、さらに課題点の絞り込みなどに寄与するのではとも考えられる。今後も取り組みがさらに発展し、多くの成果があがることを期待したい。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
<p>これまでの実績をさらに継続・発展させていく。</p> <p>① 地域の子育て支援活動へ継続的に取り組み、さらに拡充し、京都市・北区と連携し拠点化を図る。</p> <p>② 地域貢献と同時に、研究及び学びの場としての役割を明確にする。</p>	
[達成基準]	
<p>① 「すくすく赤ちゃん広場」の継続実施。</p> <p>② 紫明学区での子育て支援活動を継続・発展。</p> <p>③ 北区内での様々な子育て支援活動を継続・発展。</p> <p>④ リレー講座の試行及び修正を行う。</p>	
[行動計画]	
<p>① 「すくすく赤ちゃん広場」を継続する。(2017年度も10月実施予定)</p> <p>② 北区内における子育て支援活動拡充のため、拠点化を推進する。</p> <p>③ 子育て支援及び教育・研究の場としての施設・設備について、具体化へ向け整備する。</p> <p>④ 大谷幼稚園でのリレー講座は継続する。実習園でも実施できるか働きかけてみる。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>① 「第13回すくすく赤ちゃん広場」を10月20日(金)午前10時～11時30分実施した。</p> <p>参加者は、139名(赤ちゃん67名、母親67名、父親4名、妊婦1名)で、スタッフは学生62名を含めて129名と大盛況であった。</p> <p>*スタッフ：・北区地域子育て支援関係機関(保育園・保育所・児童館：26名)、北区主任児童委員・民生児童委員(31名)、北区社会福祉協議会(1名)、助産師(1名)、栄養士(1名)、北区子どもはぐくみ室(6名)、大谷大学短期大学部幼児教育保育科(学生62名)、大谷大学短期大学部教員(1名)の以上129名より構成されている。</p> <p>② 北区と連携して、「赤ちゃんにこちゃんサロン(11回目～13回目*2016年度は8回目～10回目が実施された)」3回実施した。</p> <p>*2015年度、2016年度と大変好評だったことから2017年度も継続して3回中2回が大谷大学を会場に実施された。*以下、内容確認。</p> <p>11回目は8月8日：紫明幼稚園にて午前10:15～11:30で、わらべ歌・手遊び・ベビーマッサージ・水遊び等を実施。9組24名の親子が参加され、スタッフとして学生2名教員2名が関わった。</p> <p>12回目は12月8日：大谷大学4号館1階多目的室にて午前10:00～11:30で、折り紙・リース作り・わらべ歌・手遊び・絵本等を実施。13組26名の親子が参加され、スタッフとして学生5名教員1名が関わった。</p> <p>13回目は2018年3月2日：大谷大学4号館1階多目的室にて(わらべ歌・手遊び・絵本等)実施予定。</p> <p>*2017年度より紫明幼稚園に加え、のぞみ保育園が共同主催者に加わり、事業の重要性から拡大していく方向性が出された。その中で、大谷大学の位置づけも大きくなっていく方向である。</p>	

*2016年度に引き続き大谷大学は、交通が便利であり室内が明るく安全にも配慮された空間であることから大変好評であり、和やかな雰囲気を楽しんでいただけた。

*北区から、今後もさらに引き続き連携の要望が出ている。

③北区内における子育て支援活動の拡充として、2016年度に引き続き2017年度も、京都市保育課主管の子育て支援事業「いないいないばあ教室」を本学において開催して欲しいとの強い要望により、2クール（6回/1クール）の12回を実施した。1クールの内容は①自己紹介、おもちゃ作り ②離乳食の話 ③離乳食の味見会（楽只保育所にて） ④0歳児担任との話（楽只保育所にて） ⑤健康についての話 ⑥ほっこり子育て広場（テーマ：いつくしむ ～子どもも私もかけがえのない存在）であり、この内容を2クール実施した。

また2017年度は、本学教員による特別講座を1回開催した。

実施日は、以下の通りである。

第1クール：①5月19日 ②6月2日 ③6月16日 ④6月30日 ⑤7月7日 ⑥7月14日

第2クール：①9月26日 ②10月6日 ③10月13日 ④10月27日 ⑤11月10日

⑥11月17日

特別講座：①10月4日（水）10:30～12:00 慶聞館502教室

テーマ：「赤ちゃんのことば」

担当者：下道省三、小川晴美、矢野永吏子、富岡量秀

*このテーマは、保育関係者から好評であり、2018年度も同じテーマでの依頼あり。

特別講座としてはなく、クール内での回としても検討したいとの意向あり。

*2017年度も京都市北区で行われた子育て支援事業は、北区と大谷大学との包括協定に基づき、「覚書」を交わし、展開している。その理由としては、学生のボランティア活動をより安心して行うことができ、且つ円滑に推進するためである。と同時に、北区における子育て支援事業の拠点としての大谷大学の位置付けを明確化した。

*2017年度の「いないいないばあ教室」の取り組みの中で、大谷大学短期大学部幼児教育保育科の学生の中から「子育て支援チーム：小川ゼミ・富岡ゼミ・矢野ゼミ」で1クール目を担当し、展開した。2クール目はボランティアチームを組み、広く学生が関わった。各回の具体的な取り組みとして、手作りの「壁新聞」を作成した。この取り組みは「手作り」のあたたかさや、学生自身と子どもとの関わりの姿を保護者に伝えるツールとなった。保護者からは毎回、好評であり、この「壁新聞」が欲しいと希望される保護者が多かった。このことから学生自身も「手作り」が、保護者の心を和ませることや、就職後の実践の場での「園だより」や「子どもの姿」を保護者へ伝える有効なものであることを実感し、そのスキルの向上の意義を確かめたと考える。

*これらの「子育て支援事業」の全体を通して、保育者としての「子育て支援力」の育ちを目指し、各事業や毎回の「ねらいと内容」を意識し、それぞれの「保護者に対応した支援とは？」を考え、関わり方を考え実践した。その具体的な実践内容として「手遊びやふれあい遊び」等を提供したことは、保育者としての実践力と同時に、保育者マインドの育ちの形成に繋がっている。

*新規事業の取り組み：本学が日頃より保育実習や就職でお世話になっている近隣の上総幼稚園より、大学との連携強化をしたい旨、申し入れがあった。本学科としても実習以外で、日頃から乳幼児に関わり、乳幼児の遊びや成長・発達の具体的な姿を学生たちに関わることの有効性を考え、実現の可能性を思案していた。この申し入れの背景には2016年度、学長裁量経費により「木製のボールプール」

や様々な乳幼児用の木製のおもちゃを整備したことがある。と同時に、大学キャンパスは乳幼児にとって「面白さ・不思議さ」等を発見する「学びの場」としての魅力を持っているからである。このことから、学内関係部署にご調整をお願いし、本学と上総幼稚園との「覚書」を締結し、実施に向け動くことができた。また2017年度に関しては、来校時の保険を学長裁量経費から支出することとなった。

④ 大谷幼稚園でのリレー講座（新規・幼稚園課外活動）の実施および行事参加

・大谷幼稚園での本学科教員による「年長児の課外活動」

2017年度からの新たな取り組みとして、本学科教員による「年長児の課外活動」を実施している。

本取り組みは、大谷幼稚園の教育課程外の活動であるということから、保護者のニーズに応えるための「幼稚園での預かり活動」としての意味がある。加えて本学科教員の専門性を大学附属大谷幼稚園での保育実践に還元する意味合いがあると考えている。

2017年度に関しては「図工：太田智子、音楽：岡村明日香、体育：矢野永吏子」の3名の教員がそれぞれの専門分野で担当した。

図工：太田智子

3回/月実施。テーマ：つくることって楽しいな！

音楽：岡村明日香

2回/月実施。テーマ：おんがくって楽しいな！

体育：矢野永吏子

2回/月実施。テーマ：うんどうあそびって楽しいな！

・藤棚祭りへの参加

2017年8月31日（木）10：00～12：00 主催：大谷幼稚園保護者会

参加者 幼稚園：園児180名 教員18名 保護者約40名

大谷大学短期大学部幼児教育保育科：1年生学生63名 学科教員2名

⑤施設・設備については、さらに充実させるために「学長裁量経費」に採択されたことと、京都市の「学まち連携大学」促進事業に採択されたことから、「木製ボールプール」を購入設置することとし、その他乳幼児関係の備品などを適宜整備する計画であり、魅力的な子育て支援環境づくりを進める。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

効果が上がっている事項

目標①としては、「すくすく赤ちゃん広場」、「赤ちゃんにこちゃんサロン」、「いないいないばあ教室」の継続的な実施を通して、高い評価と信頼関係を築き続けてきた。その結果として本学は、北区内での子育て支援事業において、確固とした位置づけを獲得し続けている。京都市そして北区から2018年度も継続実施の要望が来ており、2017年度も着実に高い評価と信頼関係を深めることができたと考えている。今後も着実に、そして来校された保護者の方々からも高い評価と信頼をいただけるよう、内容の充実と良好な環境としての施設を提供すべく、整備と改善を積極的に進めていくことが重要である。

目標②としては、各子育て支援事業を、保護者支援の視点から見た保育者の役割について、2017年度も年度末のレポートでほとんどの学生が「すくすく赤ちゃん広場」から学んだ意義について記述されており、この経験を通して学生達にとって大きな学習効果が見られたことがわかった。

また大谷大学附属幼稚園である大谷幼稚園との連携強化の一環として「藤棚祭り」への参加もあり、幼稚園のイベントの雰囲気も経験することが出来た。実習生とは違う立場で園児達と接することは、

学生にとって、子ども達との多様な関係の作り方を学ぶ良い機会になった。

2017年度は新規の「地域貢献」事業として、近隣の「上総幼稚園」との連携事業をスタートさせることができた。この事業への取り組みにより、学生が実習以外で乳幼児の遊びや成長・発達の具体的な姿を日頃から、しかもキャンパス内にいながらにして触れることが可能となった。そしてこの環境を学生自身の専門性を具体的なものとし、また保育者マインドを高める機会として活用していきたい。

さらに目標①、目標②を強化充実させるために、「学長裁量経費」や「学まち連携大学」事業と連動しながら学内事業としての整備と、公的な地域貢献事業としての整備の両面を着実に進めている。

[改善すべき事項]

- ・行動計画①②については、さらに充実・発展させていく。
- ・行動計画③については、「学長裁量経費」や「学まち連携大学」促進事業などの予算を活用しながら、学内施設状況を考慮して、効果的に整備していくこととする。
- ・行動計画④については、本学附属大谷幼稚園と連携を密にしながら、充実させていく。
- ・目標②について、学生が子育てボランティア等、積極的に地域と繋がる機会、さらに様々な機関と繋がる機会を提供したいと考え、学科としてどのような援助が出来るかを検討していきたい。
- ・現在、地域貢献事業が着実に成果を上げた結果として、プロジェクト数の増加と内容が多岐に渡っている。そのため今後は、各プロジェクト毎の深化充実を如何に実現して行くかが課題である。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

各子育て支援事業の広告、報告会資料、実施内容資料等

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

本目標は、幼児教育保育科として、学生教育および研究フィールドワークの双方の目的を実現するための重要な目標と目され、大学の社会貢献の重要性が叫ばれる近年では、かかる取り組みは意義深いと考える。学外関係者との各種の調整や信頼関係維持といった地道な努力が要求される目標について、当学科では全教員の協力により、見事に達成されていると感じられる。

また点検評価でも、さらなる改善点を指摘するなど、一層の活動の深化を目指そうとする姿勢は高く評価したい。今後もこれらの努力が実を結び続けることを期待してやまない。